
不可思議講演会

森木三理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不可思議講演会

【Nコード】

N4920K

【作者名】

森木三理

【あらすじ】

ひたすら語り続けます。ひょうきんでユーモアたっぷりなところ紳士の、昼下がりの講演会の様子を記録しました。

明るい奇跡が起きました。しかし、決してめでたくはない。何故なら私はそもそもこうしてこの場に立つべき者ではないからです。自然の摂理に反した、恐ろしいことであります。

まあしかし確かに私は賢かった。これはある種の人間が好きな高慢などではなく、事実なのです。例えば：私は自力では上手く歩けない様なほんの小さい頃から、誰かが話す言葉を良く理解しました。しかし、他の奴にはそれができないのです。当時の私たち兄弟の間には言葉さえ存在しない、通じない。ひたすら貪欲に食べ、眠り、足が立つ様になりますと喚き走り回るだけです。それが苦痛で苦痛でならなかった。

けれど、きつと普通はそうなのでしょう？そもそもそういう作りなのです。私は全て勘付いていて、敢えて無難な道を選びました。言葉も何も知らない振りをした。そのまま過ごすことで、自らと他人を平和にあるがまま保てると思ったのです。

そしてその読みは正しかった。ずっとそうしておくべきだったのでしょうが、今の私の稼ぎを考えましたらこれはこれで良かったのかも知れぬとも思ったりします。大体ベストな選択などきつと無いですからね。人生なんていうのは、その時々を必死で生き抜くのみです。確か誰かもこんなことを言っておりましたね、トルストイか――ドストエフスキーでしたか。

さて、話が逸れました。私が言葉を初めて発したのは生まれて一年経ったある春の日であります。今でも鮮明に覚えています、切っ掛けは家の一番上の兄が、誤って階段から転落したのを発見した時。慌てて駆け寄って、顔を覗くと意識がないわけです。小さな手で肩を揺すっても、頭から赤黒い血をどくどくと出すのみで、ものすご

い恐怖と焦燥感を味わいました。

急いで庭で洗濯をしているママに知らせようと無言で足の回りを這いずり回っても、ちっとも伝わらない。じゃれついていると思われたのでしょうか。焦りましたね、ええ焦りましたとも！言葉を話せる身としては、まどろっこしい事この上ないわけです。

「階段でトニーが！」

はい、初めて口にした言葉はこれでした。甲高い悲鳴のような声で。ママは私が言葉を口にしたことにまず驚き、広げていたシャツを芝生に取り落とししました。次に私に従って階段に走り寄ると、ようやくトニーを発見して助けを呼んだのです。

かくして、トニーは助かり私は英雄扱いとなりました。もしタイミングを違えて言葉を発していたなら、私はただの人間たちに対する見せ物にしかならなかったでしょうな。有り得ないことではありますが、もし仮にそれを考えたらゾツとします。

はつきり申しましょう、世の中とはタイミングです。ここぞという時を狙って優れた力をきちんと出さねば、ただの無駄打ちにしかなりません。よくいるのではないのでしょうか？飲みの席などで博識を自慢したがる輩が。そんなものはただ煙たいだけ、相槌すら面倒な疎ましい存在に他なりません。

少し失礼。長時間お話しておりましたら喉が妙に渇くもので。そういえば、私はおおよそ変わっておりましてね。いいえいいえ、言葉話を話すという部分においては御座いません。好物についてです。残念なことに、私は生魚が好きではありません。何度か試しはしたのですが、生臭さがどうも駄目なのです。まずおかしなことに魚自体に魅力を感じないのですが、まあ強いて言うならばムニエルが一番好きですな。カリカリの小麦粉にかぐわしいバターの香りは素晴らしいものです。

おやおや、そんな不思議そうな顔をなさらないでください。太った人間は皆肉が好きですか？やせた人間は皆ベジタリアンですか？そうその通り、違います。先入観で物事を判断するのは愚かなことです。猫である私も、また然り。

もつとも、私はもう一生猫の世界に戻れやしないのです。余りにも人間の世界に染まりすぎた。葉巻も酒もギャンブルも、娯楽の楽しさだけでなく美味しい食べ物までも一通り覚えてしまった今、どうして元に戻れましょう？硬いキャットフードや臭い缶詰に満足して、猫じやらしに喉を鳴らしていた昔などに。

同郷の仲間たちにもこの感動を分け与えたいのですが、いかんせん言葉が通じないのです。もしかしたら私が気付いていないだけで彼らの世界では意思の疎通を行うための何かが存在するのも知らない、モールス信号みたいな方法か何か、見当もつかないような得体の知れないものです。やれやれ。

この中にもし猫語が分かる方がおられましたら、是非教えてください。私にしたら人間の言葉よりも興味深いです。なんせ奴等の声ときたら――にゃあにゃあと気儘に喚いているだけにしか聞こえないのだから！

さて、長くなりましたがご静聴ありがとうございました。まだ人間の言葉は勉強したてで、上手く猫の気持ちを表すことができないのです。あなたたちの言葉にはない感情なんかもあるのです。

当面の目標は、自伝の本を書くことですな。この手ではタイプもままならないので代筆にはなりますが。私の存在を後世に残したいのです。なんせ猫の寿命は人間よりもずっと短いですから。

では、ごきげんよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4920k/>

不可思議講演会

2011年11月15日13時32分発行